

令和 2 年 7 月 14 日現在

機関番号：33704

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15H05090

研究課題名(和文) がんの子どもの復学支援基盤構築のための復学支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a school reentry support program for children with cancer to develop support bases

研究代表者

大見 サキエ (OMI, SAKIE)

岐阜聖徳学園大学・看護学部・教授

研究者番号：40329826

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は復学するがんの子どもの理解と支援を促進するための基盤を作ることであり、復学が円滑に進むために復学支援ツール(絵本、児童用・教員用・保護者用の各パンフレット)を作成し、研修会や講演会で、これらを活用した復学支援の方法を説明した。復学支援ツールは全国のがん拠点病院や教育機関等に配付し、学会等でも紹介した。また、復学支援サイトを創設しHP上で復学支援ツールに誰でもアクセスし活用できるようにした。その結果、復学支援ツールは徐々に認知され、医療機関等で活用されるようになった。これらの復学支援ツールを活用した支援活動は、一つの復学支援プログラムとして提案できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、復学支援ツールを作成することで、復学支援活動のプログラムモデル案を提供することができた。これらを活用した研修会の参加は、教員の専門性の向上という点で病弱教育の充実に寄与する。また、復学支援ツールは当事者(保護者)・医療者や教育者等を繋ぐツールとして復学支援促進のために有効であり、配布した全国の医療機関・教育機関から一定の評価を得ている。HP 上での広報活動も直接的でタイムリーな支援に繋がっており、HP の社会的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：This study was designed to develop the foundation for promoting understanding and support for children with cancer when they reenter school. We designed school reentry support tools to facilitate the reentry process. These tools included picture books and brochures for children, teachers, and parents. We explained the methods of supporting children's reentry to school using these tools at seminars and workshops, distributing the tools to hub hospitals for cancer treatment, and educational institutions all over Japan, and introducing the tools at academic conferences. We also set up a website for supporting children's reentry to school and made the tools accessible and usable by anyone. Consequently, these tools gradually came to be recognized and utilized at medical and educational institutions as supporting materials at hospitalization and discharge. We suggest that activities for supporting children with cancer be conducted in school reentry support programs by using these tools.

研究分野：医歯薬学 生涯発達看護学 小児看護学

キーワード：がんの子ども 復学支援 教員 保護者 復学支援ツール 研修会 復学支援プログラム 連携

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

平成 25 年(2013)全国に小児がん拠点病院が指定されたことや文部科学省が同年「病気療養児に対する教育の充実」の通知で、教職員の専門性の向上(担当する教職員の専門性の向上、医療機関と連携した研修の機会確保)やその他(医療機関・福祉・保護者との連携の確保)等を求めており、復学支援は子どもや家族、学校関係者、医療者の側面から検討し、支援の具体的方策を見出す必要がある。国外では、すでに復学支援プログラムが試みられているが、国内にはない。従って子どもと家族が周囲の児童からの理解と支援が得られるための復学支援ツールを考案し、これらを活用した復学(教育)支援プログラムを検討する必要がある。

### 2. 研究の目的

復学支援体制構築のために教員対象の啓発研修会を行うとともに、復学する子どもと家族を支援するために活用する復学支援ツールを作成し、復学支援プログラムモデル案を考案する。

### 3. 研究の方法

(1) これまで 10 年間研修会を実施してきた A 市での教員の認識についての調査。

無記名自記式質問紙調査：2015. 10 月 A 市全域の小学校 21 校、中学校 8 校、特別支援学校 1 校の教員および養護教諭 991 名に配布した結果、回収 746 名(回収率 75.3%)を分析とした。

(2) C 市での教員の復学支援に関する意識調査

無記名自記式質問紙調査：2017. 2 月～3 月 C 市の小学校 23 校、中学校 48 校に勤務する教員 1919 名に配付。回収 1318 名(回収率 68.6%)。がんの子どもとの接触経験の有無に回答した 1309 名を分析対象とした(有効回答率：68.2%)

(1)(2) は受け入れる側の教員の意識調査をすることで、どのような研修プログラムが必要かを検討するためである。

(3) 絵本の復学支援ツールとしての活用可能性の検討

絵本の読み聞かせによるがんの子どもへの理解促進を目的に、小学校 3 年生の 2 クラスの児童を対象に、試作した絵本「おかえり！めいちゃん」の読み聞かせを実施し、自記式のアンケート調査を行うと共に、絵本の主人公の気持ちや病気などについて、質疑応答・感想について子どもたちとの意見交換を実施した。(2015 年 7 月)児童 42 名のデータを分析した。

道徳教育への活用可能性の検討(がんの子どもに対するいじめ防止を道徳の観点から検討するために活用を試みた)

小学 5 年生 2 クラスを対象に道徳教育の教材として活用し、授業後の学習した内容の感想を記述したものを質的データとして 59 名分を分析。授業のねらいは「相手の立場に立って思いやりや親切な心を育てる」である。(2018 年 9 月)

(4) 復学支援ツールの作成・発送と学会等での広報活動

絵本の改訂版を出版、児童用パンフレットの改訂、教員用パンフレット、保護者用パンフレットの作成と発送

学会等での広報活動

復学支援ツールを活用した研修会や学会での講演

(5) 復学支援ツールの活用状況と有効性の検討のためのフィードバック調査

発送した医療機関や教育機関のうち、メールや HP 上で反応して下さった方々に

復学支援ツールの活用状況について面接調査およびアンケート調査実施。

### 4. 研究成果

(1) A 市の調査結果

がんの子どもとの接触経験のある教員は 11.7%(10 年前の調査では 16.1%)であり、退院後にがんであると知った教員が 33.3%と、入院してからの支援がされにくいことがわかった。クラスメートへの説明も約半数であり、実際、どのように説明すればよいか対応に困っており、医療者との連携を望んでいた。これまでの研修会参加による認識の変化は 46.9%、変化した事は「支援の大切さが分かり、学校全体で体制を作り取り組もうとした」「病院との連携の大切さを感じるようになった」等で、変化無しは、「がんの子どもに出会わなかった」が最も多かったことから研修会は一定の効果ありと考える。しかし、今回も小児がんの治癒率の認知度は低く、また、がんの症状を「あまり・全く知らない」人が 70%前後と 10 年前とほぼ同様の傾向を示したことから、今後も学校での支援体制を構築するためには、教員への啓発のための研修会を新人教員研修等にも取り入れ、推進していく必要がある。

(2) C 市の調査結果

がんの子どもに接触した経験有 189 名 (14.4%)、無 1120 名 (85.6%)。先行研究における経験率とほぼ同様であり、復学する子どもへの対応は不十分になる可能性がある。経験有の内、担任 81 名であり、病名を知った時期は、「入院時」に次いで「退院後」であり、入院中の学校とのつながりや子どもへの配慮がされない可能性が示唆された。さらにクラスメートに説明した担任は 3 割にも満たず、復学後の情報が正しく伝達されずいじめ等の問題に発展しかねない現状が浮き彫りになった。さらに、校内支援体制ができていると回答した教員は 8.2% しかなく、支援体制を組織化する具体的な方法を伝授する研修会の必要性が示唆された。教員は「緊急時の対応」「病気の理解」「支援体制づくり」の対応は困難だと考えており、復学支援を経験した教員と共に行うワークショップ形式の研修会など方法を考える必要がある。

以上のことから、これまで規模の異なる 3 つの地域の調査 (A,B,C) で、小児がんの発症率を考慮すると、概して教員ががんの子どもと接触する経験率は 14-15% 程度であることが示唆され、さらに教員のがんの子どもの理解や復学支援に関する意識は同様の傾向を示していた。また、同じ地区での 10 年後の調査の比較でも結果はさほど変化なく、依然としてがんの子どもへの理解は促進されていないことがわかった。稀な経験であるからこそ、その経験を生かした復学支援プログラムが必要である事がより明確となった点が本研究の成果の一つといえる。

### (3) 絵本の復学支援ツールとして活用可能性

#### 絵本の読み聞かせによる説明効果について

児童にはこの絵本の主人公が白血病という小児がんであることを事前に説明して読み聞かせている。表 1 に示したように半数以上の児童ががんを認知していると同時に、主人公の入院時の状況や気持ちを共感的に理解しており、絵本はがんの子どもの理解促進のための説明資料として一定の効果があることがわかった。また、読み聞かせガイドを活用し、読み聞かせ後の質疑応答・意見交換することで児童の理解をより一層深めていた。読み聞かせガイドは補足資料として効果的であり、改善の余地があったものの、絵本の読み聞かせは、復学する子どもの理解に役立つことが明らかとなった。

表 1 . がんはどんな病気だと知っていたか? (N=22)

カテゴリー (記述数)	記述内容
症状 (12)	薬を飲んで、どんどん髪の毛がなくなる病気
	どんどん髪の毛が抜けていく
	吐いてしまう病気
	頭がガンガンする病気
	声が出なくなる病気
	えらいこと、 だるくなる
	はいが重くなるなど
悪い予後 (7)	時々大人は死んでしまう病気
	死んでしまう病気
	分かることがおそいとその後何年後かにしんでしまう病気
	どんどん体の中で広がる病気
	普通の病気とはちがう
	体にできる最悪の病気
発生部位 (3)	入院しないといけない病気
	おなかの中の病気
	頭や体になる病気 体の病気
精神的苦痛が大きい (3)	とてもつらくなる病気
	たばこやお酒を一杯吸ったり飲んだりしたくなる病気
	心臓が痛む病気

#### 道徳教育への教材活用結果

児童は主人公の立場に立った時の気持ちは治療を含め入院生活そのものの怖さ、悲しさ、辛さ、寂しさだけでなく、友達関係に関するさみしさ不安をイメージすることができており

(表2) 復学した際の気持ちやその時にどのように接したらよいかについても考えることができていた。主人公の姿から、自分もお手本にしていきたいという意志表示の記載が多かったが、一方、「治療をやりたくない」「自分だと頑張れない」という率直な記載もあり、意見交換の題材も提示された。そして「不安を取り除き、安心してもらうことが大切」「手紙を書くことが大切」「あきらめないことが大切」「支え合うことが大切」「命は大切」「白血病は闘える病気であることがわかった」等今後生きていくうえで、命を大切に、病気に出会っても逞しく生きていくことの重要性や他者への配慮の重要性を学んでいた。この授業の狙いは十分達成されたと考えられ、活用した絵本は道徳授業の教材として耐えうるものであり、今後、多くの学校で活用されることが期待される。なお、該当校は現在も教材として活用し続けている。

また、がん教育が平成 29 年度から順次開始となっているが<sup>1)</sup>、がん教育の方法論については、発達段階ごとに検討が必要であり、この絵本は小学生向けのがん教育の教材に適していると考えられ、今後の活用が期待される。さらに普及を図り活用効果を検討する必要がある。

表2 . 入院中のめいちゃんの気持ち
一人で入院するのは怖い、寂しい、悲しい、
白血病になってびっくりした、悲しい、嫌だ、怖い、辛い、もう死にたい、不安
自分だけなんでこんなことになったのかな
髪の毛が生えてくるのかな、この状態は嫌だ
早く治りたい、早く退院したい、
皆に会えなくて、悲しい、寂しい、みなは元気かな
皆が覚えてくれているかな、自分のことを心配してくれているかな
早く学校に行きたい、友達と遊びたい、
(戻った時) 皆からからかひやいじめられないか不安、詮索されるのがつらい
(戻った時) 友達でいてくれるかな
だんだん入院生活に慣れてきた
地元の学校がいい

#### (4) 復学支援ツール作成・配布と広報活動の成果

教員用パンフレットはこれまでの事例介入研究や教員対象のアンケート調査や面接調査などから教員に伝えたいことを盛り込んだ原案を作成し、経験者の教員数名から意見を聴取すると共に、共同研究者間で何度も検討し、最終調整して完成した。これは経験したことのないがんの子どもへの理解と対応、校内支援体制づくり、医療者や保護者との連携など初心者でも取り掛かれるような内容である。保護者用パンフレットも、当事者経験者やその保護者から意見を聴取し、同様の経過で完成した。診断直後の保護者の混乱と不安定な状況の中でまず、何から始めるか、冷静に対処できるようにと具体的事項を盛り込んだ。また、既存の児童用パンフレットも改訂版を作成した。これはクラスメートに説明する時に活用できるものであり、活用実績も多数あり、教員自身からもがんの子どもへの理解に役立つとの意見もある。これらのツールは全国のがん拠点病院及び関連病院、近隣の教育機関に発送し、活用を依頼した。その結果、再度郵送希望の施設や個人的な要望には追加発送し、現在も要望に応じて発送している。

日本法政学会第 123 回研究会の幹事校としての責任を担い、シンポジウムを企画。自らも「病気療養児に対する教育支援の取り組みの現状と課題」と題してシンポジストとして講演した(2015.11.29)。また、日本育療学会第 21 回学術集会長を担い、会長講演で「病気療養児の復学支援体制の構築 - 現状と課題 - 」で復学支援体制の充実のための課題を講演した(2017.8.26)。復学支援サイトの HP「スクリエ(school re-entry)」を開設し(2018.3)、復学支援ツールを掲載し、いつでも誰でもアクセスし活用できるようにした。その結果、退院間近の児童の退院支援会議に活用できた、絵本そのものが患児を支える本となった、学校の先生方への説明ツールとして活用した等の連絡が直接届き、徐々に周知されるようになってきている。その他、日本小児保健協会学術集会、日本小児看護学会学術集会、日本心理臨床学会学術集会、がんの子どもへのトータルケア研究会静岡、愛知県病気療養児の修学支援に関する研修会等で絵本をはじめとする復学支援ツールを紹介・配布し、広報活動を実施した。

3 つの研修会で、支援ツールの活用を交え復学支援に関する講演をした。岐阜市教育委員会主催院内学級担当者会議での講演「院内学級における配慮事項及び復学支援 医療者の視点から」(院内学級担当者)(2018.4.12)、岐阜県学校保健講習会講演「復学支援体制の構築を目指して-小児がんの子どもへの理解と支援」(養護教諭約 100 名)(2018.7.3:安八、西濃地区)、長良特別支援学校教職員研修会「長期入院児童生徒の

原籍校へのスムーズな復学支援、連携」(2018.8.21)。特に院内学級の教員からは、復学支援の重要性を認識しており、是非活用したいとの反応が見られたが、個々の事例によって活用が難しいこと、対応について意見交換できた。また、養護教諭からは、講演を聞いて改めて、小児がんに限らず復学支援の重要性を認識したとの反応が見られた。

2つの招聘講演(福岡、岡山)でも復学支援の重要性と復学支援ツールの活用について講演した(2018.11.24, 12.1)。現場の教員からは「手探りでやっており不安であったが、支援のあり方がわかり、これからはこれで良いのだと自信を持ってやっていける」という反応や、支援ツールを活用したい等の反応があり、着実に情報は拡散している。

#### (5) 復学支援ツール活用状況調査による成果

フィードバック調査に協力いただいた方々は医療関係者、教育関係者、保護者等であり、現在、データ整理中であるが、概ね復学支援ツールをそれぞれの場面で活用しており、当事者である子どもや保護者、教員にとって有効なツールであるとの評価を得ている。また、一般の大学生対象に講義の一環として活用した事例も数例あり、教材としての有効性も報告されている。

復学支援ツールは各医療機関で独自に作成したものが散見されるが、児童目線、保護者や教員目線を重視してそれぞれが連動して作成されたものは国内では見当たらない。これは多くの調査や事例研究を通して得られた知見を反映したものであり、多様ながん患児のニーズに応じて必要な部分を臨機応変に活用できるように示した一つの活用モデルである。例えば、当事者である児童をサポートする場合、まずは絵本を紹介し、読み聞かせを実施する、児童用パンフレットを活用して説明するというプログラム、教員の復学支援をサポートする場合、教員用のパンフレットを紹介し、その後絵本や児童用パンフレットを紹介し、支援の流れとポイントを説明するというプログラムなど対象の状況に応じて展開するプログラムと考える。国外ではきょうだいや祖父母を対象としたツールとプログラムが開発されており、今後、国内でも検討が急がれる。

本研究の成果は復学支援ツールを考案し、復学支援プログラムの一つを提案できたことだと考える。HP上やがん拠点病院での活用がされることで、全国的に波及していくことが期待できる。

引用文献 若尾文彦：がん化学療法 特集 子どもからのがん予防、日本のがん教育の現況と課題、42(8)、2015、921-923.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 大見サキエ、宮城島恭子、坪見利香	4. 巻 2
2. 論文標題 脳腫瘍患児2事例の復学支援-退院時調整会議の有効性の検討-	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学看護学研究誌	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大見サキエ、安田和夫、森口清美、高橋由美子、畑中めぐみ、谷脇歩実、宮城島恭子、谷口恵美子、河合洋子、平賀健太郎、堀部敬三	4. 巻 1
2. 論文標題 小児がん患児の復学支援ツールの開発-小学生に対する試作絵本の読み聞かせ効果と活用法の検討-	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学看護研究誌	6. 最初と最後の頁 3-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大見サキエ	4. 巻 第5号
2. 論文標題 がんの子どもが復学する時のクラスメートへの説明 場面想定法を用いた時の中学生の認識	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学看護研究誌	6. 最初と最後の頁 13 22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大見サキエ、森口清美、河合洋子、安田和夫、谷脇歩実
2. 発表標題 小児がんの復学支援に関するC市の教員の認識 - 周囲への説明の状況 - ( 1 )
3. 学会等名 第7回日本小児診療多職種研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森口清美、大見サキ工、河合洋子、安田和夫、谷脇歩実
2. 発表標題 小児がんの復学支援に関するC市の教員の認識 - 支援体制に必要なこと - ( 2 )
3. 学会等名 第7回日本小児診療多職種研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大見サキ工
2. 発表標題 小児がんの復学支援 - 学校現場に求められる支援体制 -
3. 学会等名 第7回日本小児診療多職種研究会 ( 招待講演 )
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大見サキ工、森口清美、河合洋子、平賀健太郎
2. 発表標題 A地区における小・中学校教員のがんの子どもの復学支援に関する意識 - 10年前との比較 ( 1 ) -
3. 学会等名 第64回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森口清美、大見サキ工、河合洋子、平賀健太郎
2. 発表標題 A地区における小・中学校教員のがんの子どもの復学支援に関する意識 - 10年前との比較 ( 2 )
3. 学会等名 第64回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大見サキ工、森口清美
2. 発表標題 がんの子どもの復学支援ツール（絵本・冊子）の紹介
3. 学会等名 第6回日本小児診療多職種研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大見サキ工、森口清美、谷口恵美子、河合洋子、畑中めぐみ、宮城島恭子、高橋由美子、谷脇歩実、安田和夫、平賀健太郎、堀部敬三
2. 発表標題 小児がん患児の復学支援ツールの開発-患児をクラスメートが理解するための絵本作成の過程-
3. 学会等名 第14回日本小児がん看護学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 大見サキ工、森口清美、畑中めぐみ、河合洋子、高橋由美子、谷口恵美子、谷脇歩実、宮城島恭子、堀部敬三
2. 発表標題 がんお子どもを理解するための絵本作成と小学生対象の読み聞かせ実施の効果
3. 学会等名 中部小児がんトータルケア研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 大見サキ工、谷口恵美子、森口清美、高橋由美子、平賀健太郎、河合洋子
2. 発表標題 教職を目指す大学4年生の特別に配慮の必要な子供の対応-発達障害児に対する認識-
3. 学会等名 第62回日本小児保健学会学術集会
4. 発表年 2016年



1. 発表者名 大見サキ工、高橋由美子、森口清美、平賀健太郎、河合洋子、谷口恵美子
2. 発表標題 教職を目指す大学4年生の特別に配慮の必要な子供の対応-発達障害児に対する認識-
3. 学会等名 第62回日本小児保健学会学術集会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 大見サキ工
2. 発表標題 病気療養児に対する教育支援の取り組みの現状と課題
3. 学会等名 第123回日本法政学会 シンポジスト
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 大見サキ工、森口清美、畑中めぐみ、河合洋子、高木歩実、宮城島恭子、平賀健太郎、高橋由美子、堀部敬三
2. 発表標題 がんの子どもを主人公とした絵本の道徳教育への活用可能性の検討
3. 学会等名 第33回愛知県病弱児研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大見サキ工
2. 発表標題 病気療養児の復学支援体制の構築 - 現状と課題 -
3. 学会等名 日本育療学会第21回学術集会 会長講演
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大見サキエ
2. 発表標題 病気を抱える子どもの担任や院内学級に配属された時に大切にしてほしいこと・知っておいて欲しいこと
3. 学会等名 東洋大学主催「アウトリーチによる相談支援および相談員研修活動」研修会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大見サキエ、森口清美、がんの子どもの復学支援プロジェクトチーム	4. 発行年 2016年
2. 出版社 ふくろう出版	5. 総ページ数 1-32
3. 書名 おかえり！、めいちゃん	

〔産業財産権〕

〔その他〕

復学支援サイト「スクリエ」 <a href="https://school-reentry.com/">https://school-reentry.com/</a> スクリエ（復学支援サイト） <a href="https://school-reentry.com/">https://school-reentry.com/</a>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	河合 洋子  (KAWAI YOKO)  (10249344)	日本福祉大学・看護学部・教授    (33918)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	畑中 めぐみ (HATANAKA MEGUMI)		
研究協力者	高木 歩実 (AYUMI TAKAGI)		
研究協力者	安田 和夫 (YADUDA KAZUO)		
連携研究者	森口 清美 (MORIGUCHI KIYOMI) (80279356)	就実大学・教育学部・准教授  (35307)	
連携研究者	宮城島 恭子 (KYOKO MIYAGISHIMA) (60345832)	浜松医科大学・医学部・講師  (13802)	
連携研究者	平賀 健太郎 (HIRAGA KENTARO) (30379325)	大阪教育大学・教育学部・准教授  (14403)	
連携研究者	堀部 敬三 (HORIBE KEIZO) (30209308)	独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター・その他部局等・研究員  (83904)	
連携研究者	高橋 由美子 (TAKAHASHI YUMIKO) (80728147)	岐阜聖徳学園大学・看護学部・講師  (33704)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	谷口 恵美子 (TANIGUCHI EMIKO) (20320939)	岐阜聖徳学園大学・看護学部・准教授  (23702)	
連携研究者	金城 やす子 (KINJO YASUKO) (90369546)	名桜大学・健康科学部・教授  (28003)	